

視察報告書

発行No. S-140709
作成日 H26.7.11
作成者 市民クラブ 佐原充恭

視察地 青森県弘前市 弘前市役所 日時・場所 H26.7.9(水)14:00-16:00

視察テーマ 定住自立圏連携施策について

視察目的 弘前市を中心市とした定住自立圏域連携の取り組みを視察し、刈谷が中心市となる衣浦定住自立圏連携の参考とする

視察メンバー(敬称略) 会派『市民クラブ』(沖野温志、伊藤幸弘、山内智彦、黒川智明、中嶋祥元、鈴木浩二、佐原充恭)

1)弘前圏域定住自立圏の概要について(行政経営課 山内様ご説明)

出展:弘前市HP

1.事業の目的

中心市宣言を行った弘前市と周辺市町村(右図 2市3町2村)の間に相互に役割分担し、人口定住に必要な都市機能・生活機能の確保・充実に努め、安心して暮らし続けられる自立圏域を形成する。



2.事業の経緯

- ・H22.7 津軽南地域市町村長円卓会議を開催、弘前市を中心市とする定住自立圏域の実現に向け合意。(当時は合併も念頭にあったとの事)
- ・H23.3 第1回市町村長会議を開催、弘前市長が中心市宣言を発表。
- ・H23.9 圏域8市町村が定住自立圏域協定の締結に関わる議案を各自治体の9月議会に提出。
- ・H23.10 関係7市町村が「弘前定住自立圏域形成協定」を締結。
- ・H24.2 「弘前圏域定住自立圏共生ビジョン」を決定。

3.連携施策の事例

- ①救急医療体制の充実・・・休日・夜間急患診療、休日在宅診療体制の維持。
- ②学校給食の充実・・・弘前市→黒石市への学校給食提供の検討。
- ③農作物被害の軽減・・・探索機により圏域に生息する猿の生態調査を実施。
- ④企業立地ガイド作成・・・圏域ガイドを作成し、産業フェア等に出展。
- ⑤広域観光商品の充実・・・首都圏キャンペーン等により広域観光PRを実施。
- ⑥地域防災の充実・・・備蓄拠点整備、合同防災訓練の実施。
- ⑦し尿処理の広域化・・・処理施設を新設し、域内汚水の一括処理を進める。



4.財源(包括的財政措置)

特別交付税の交付・・・中心市=4,000万円/年(来年度より倍額予定) 周辺市町村=1,000万円/年

5.事業の評価方法

今後5年間で圏域が目指す将来像や、その実現のための具体的取組みをまとめ、共生ビジョンを策定する。策定後はPDCAを回しながら定期的に進捗状況を把握していく。パブコメ等により圏域住民の要望も広く募り、懇談会等での意見も担当課にフィードバックし、新たな施策検討につなげていきたい。

6.今後の課題

- ①定住自立圏の取組み、圏域の存在が市民に浸透していない。
- ②中心市の既存事業がベースとなる連携事業が多く、事業運営の殆どを中心市である弘前が担っており、事務負担が集中している。特別交付税以外に2,400万円程度の経費がかさみ、持ち出しとなっている。既存事業の拡充や新事業展開のための財源確保も課題である。

所感：当地特有の連携施策が興味深かった。弘前自立圏域の場合、中心市である弘前の規模が突出している為、同市の都市機能を周辺市が利用したいとのニーズが高く、事務負担も大きくなるとの事だった。衣浦定住自立圏においても、無難な連携や目の前の課題解決に加え、合理化やスケールメリットを生かした共同調達など、中心市と周辺市がウインウインの関係になれる連携が必要である。また、連携効果を定量評価する指標づくりも今後の課題だと感じた。

2)弘前公園見学(総務係 工藤様ご案内・ご説明)

1.公園の概要

市の中心部に位置し、弘前藩10万石の津軽家代々の居城である弘前城の敷地を利用した公園で、総面積は約49万2,000㎡(約14万9,000坪)である。明治28年(1895年)より公園として開放され、全国から多数の観光客が来園。

2.弘前城の概要

寛永4年(1627年)、落雷により発生した火事により焼失した。その後、文化7年(1810年)、幕府が弘前藩に蝦夷地(北海道)の警備を命じ、あわせて新しい天守の造営を認めたことにより再建された。明治期以降も天守や城門、櫓は保護され、5つの城門は国の重要文化財になっている。



所感：全国的に有名で、素晴らしい風格を持つ公園である。刈谷城再建のベンチマークにはなるが、ハードとしては再建できても歴史的価値までは再建できない。再建する意味・意義の熟考が必要。次世代への歴史継承に加え、通年でどうにぎわいを創出するのか、年代層ごとにどう楽しんでもらうのか、そこをどう仕掛け、将来に渡ってどう維持していくのかなど、様々な課題を感じた。

視察報告書

発行No.	S-140710
作成日	H26.7.12
作成者	市民クラブ 佐原充恭

視察地	青森県五所川原市 立佞武多の館	日時・場所	H26.7.10(木)9:45-11:00
視察テーマ	中心市街地再生について		
視察目的	立佞武多(たちねぶた)をテーマに中心市街地活性化に取り組む同市を視察し、刈谷市の取組みの参考とする。		
視察メンバー(敬称略)	会派『市民クラブ』(沖野温志、伊藤幸弘、山内智彦、黒川智明、中嶋祥元、鈴木浩二、佐原充恭)		

1) 五所川原市の特徴

出展:五所川原市HP

五所川原市は、近接する2町をまたいで3市町村合併した結果、市域が飛地となっている全国でも珍しい自治体である。



2) 中心市街地活性化について(都市計画課 小田切課長補佐ご説明)

1. 事業の目的と経緯

後継者不足や消費者ニーズの多様化、郊外大型店への購買客流出による中心市街地の衰退に歯止めをかけるため、かつて造られていた巨大ネプタを復元し、祭りとして定着させるとともに、H16には立佞武多の館を開館した。また、その周辺の区画整理も行う。



2. 道路等の公共施設整備

H16より都市計画道路、区画道路、特殊道路、電線類地中化、立佞武多広場、耐震性貯水槽などの整備を進めている。

3. 財源

H16-17は都市再生区画整理事業(補助率50%)、H18-22は都市再生整備計画事業のまちづくり交付金(40%交付金)、H23-27までは社会資本整備総合交付金(区画50%、道路60%)を活用。

4. 成果

①立佞武多の観光客数の増加

観光入込客数はH22に147万人に達し、H27の目標値を150万人としているが、東日本大震災の影響等によりH25は127万人に落ち込み、目標到達は不透明な状況となっている。

②地震等災害時の飲料水確保

立佞武多広場に耐震性貯水槽を設置し、飲料水3L/人×10,000人×3日分を確保できるようになった。

③イベント回数の増加

H22:6回/年→H25:13回/年に増加し、目標最終年度を待たず前倒しで達成した。

5. 評価

整備費用(例:立佞武多の館建設費約41.2億円)の費用対効果に疑問を抱く意見がある一方で、シャッター街の解消につながったり、狭隘道路が解消され、開放的な街並が形成されつつある為、中心市街地の活性化に寄与するとの好意的な意見も多い。また、融雪溝が整備され、冬季の除雪負担が軽減された事も喜ばれている。

6. 今後の課題

3年後の市庁舎の移転計画にあわせて駅前整備を進め、商業店舗誘致による空き地の解消にも努めていく。

2) 立佞武多の館(たちねぶたのやかた)見学

1. 施設の概要

開館:H16 敷地面積:3,253.6㎡ 延床面積:7,598.2㎡ 階数:地上7階建
指定管理者:五所川原市観光協会 入場料収入:約6,200万円/H25

2. 立佞武多とは

高さ約20mを超える五所川原市特有の巨大佞武多(ねぶた)。大正以前は豪商や大地主の権威の象徴として高さを競っていたが、電気の普及に伴い張り巡らされた電線により縮小を余儀なくされ、一旦姿を消した。H8に復元作業が始まり、H10に祭りにも登場し、全国的に有名な夏祭りとして定着している。

3. 施設の特徴

内部は吹き抜けになっており、3名の若者が作る巨大ねぶたの製作現場を見る事ができる。1Fから4Fまでスロープで徒歩移動ができるので、様々な高さからねぶたを眺める事が可能。壁面の巨大スクリーンではねぶたの歴史がVTRで紹介されている。6Fは展望ラウンジ、5Fは会議室等、1Fのホールには物産コーナーがあり、ねぶた関連をはじめ青森地方の物産が販売されている。



所感: 立佞武多を起爆剤とした中心市街地再活性化戦略はある程度成功していると感じた。刈谷に置き換えれば、昨日の弘前公園が亀城公園で、立佞武多が万燈である。例えば構想中の刈谷城と歴史博物館の万燈PR展示がうまくコラボレーションすれば集客につながるはずだが、そのあたりを市はどう考えているのか。亀城公園再整備構想の全容、費用対効果、にぎわい創出戦略等はまだまだ明らかにされていない。良い提案であれば否定的な意見も払拭できるはず。昨日も感じたが、そろそろ市の戦略の内容を知りたい。